



154号

2010/6 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈お寺で祝福を受ける〉(説明10p)カンボジア王国バンテアイミエンチェイ洲ツールボンロー村 2009年9月7日 撮影:川口洋一

‘わんりい’ 154号の主な目次

北京雑感(45)「北京の行く末は？」	2
私の調べた四字熟語(43)「 <small>てんせましんちよう</small> 鉄石心腸」	3
媛媛讲故事(24)「八仙の伝説Ⅳ・張果老」	4
土の香りのモダンアート・農民画⑨「花傘」	6
アジアを読む(67)「司馬遼太郎エッセンス」	7
イラストレーター・ <small>イェリン</small> 叶霖さんのこと	7
フィールドノートの走り書き1	8
カンボジアの村の暮らし(2)	10
6月の歌・歌詞「 <small>xiāngjiān de xiǎolù</small> 郷間的小路」	11
アフリカとの出会い(43)「恐怖の鞭」	12
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	13
スリランカ紹介(39)「スリランカの世界遺産Ⅲ」	14
私の四川省一人旅(36) 亜丁22	16
【活動報告】漢詩朗読の会	19
‘わんりい’ 掲示板	20

♪「中国語で歌おう!会」6月の歌♪
中国でも台湾でも良く知られ歌われている
映画「台湾校園」の挿入歌

xiāngjiān de xiǎolù
郷間的小路(村の小道)(歌詞11p)

叶佳修/作詞・作曲

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分
小田急線南口徒歩5分町田
東急裏109 ファッションビル7F

6月11日(金) 19:00~20:30

指導: zhào fèng yīng
趙鳳英(中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●参加費:1500円(体験無料)

■「中国語で歌おう!会」7月の講座日:7月9日(金)

■初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局(☎042-734-5100)へお問合せ下さい。

先日、早々と上海万博に行っておられた方が、万博会場のトイレがきれいに使用されていたり、パビリオン見学者が長時間じっと並んでいたりと、中国の人々のお行儀が随分良くなったのに感心し、「中国はこれからぐんぐん良くなるだろう」との感想を述べました。と、すかさず、「万博が終われば直ぐ又元に戻りますよ。オリンピック後の北京のように……」という声があがりました。

オリンピック後の北京について、何人もの方々から、バスや地下鉄の乗り降りは、すっかり昔に戻ってしまったと聞きましたから、「上海も、万博が終われば元に戻ってしまうだろう」との声に、思わず頷いてしまいました。中国が好きで、特に公共交通の「ご愛用者」としては、中国の人々が少しでも早くスマートな整列乗車を身に付けて欲しいと願っていますが、やはり、一朝一夕では無理だと思います。

私が北京のマナー向上作戦を見たのは、オリンピックの半年前の頃でした。バスの乗り場に、赤やオレンジ、グリーン等派手なベストを着て、手に旗を持った係員が出て、バスの到着と同時に我先に乗り込もうとする人々を制止し、降りる人が終わってから順番に乗るよう指導していました。

しかし、北京のバス停も運行ダイヤも、整列乗車には向かないように出来ていると感じました。一般的に、北京のバスの運行時刻表はありません。〇〇路線のバスが何台も続いて来るかと思うと、長いこと待たされることもあります。それで、待っている人々はどうしてもこのバスに乗ろうという気持ちになります。

一度、混んだバスに乗り合わせて、北京らしい光景に遭遇しました。北京のバスの多くは、前から乗って中ほどのドアから降りるのですが、前の方にいた人が降りたいのに降り口まで来られず、前のドアから降りようとしていました。当然、乗ってくる人と鉢合わせで降りられません。乗る人々のスピードもおちて、乗り口付近で人の塊ができました。

入り口で人の流れがもたついている間に、後の降車口から降りる人がいなくなると、運転手さんがドアを閉める前に、後ろの方で並んでいた人の中から何人かが、この降車口から乗り込んで来たのです。前の方で整列乗車を指導していた係員が慌てて飛んで来て制止し、運転手さんも急いでドアを閉めましたが、既に6,7人が乗り込んでしまいました。前の方の混乱も収まって、バスがやっと発車の体制に入った時、後ろで待っていたバスが、前の方の空いたスペースに乗り入れてきました。

整列乗車のキャンペーンが始まってからは、同じ路線のバスは、前のバスの乗降が終わるまで後ろで待つようになりましたが、今回は、前のバスの遅れに痺れをきらせたの

でしょう。すると、行列して乗れなかった人々が殺到し、そのバスの周りに人だかりが出来ました。私の乗ったバスはやっとドアを閉めて発車の体制になったのですが、前に入ったバスが邪魔になって発車できず、更に遅れる結果になりました。

一部始終をバスの上から見ていて、マナー向上といっても、人に対する教育ばかりでなく、バス内で降り口に移動し易くする工夫や運行時刻表の整備を含めたハード面を工夫しなければ難しいように思いました。バス停では、どのバスも目的地を通るので、早く来たバスにどれでもいいから乗りたい人が待つ場所もいるでしょう。しかし、路線が多く、従って乗降客も多い繁華街のバス停では、どのような工夫が出来るのか、難しい問題です。とはいえ、人間の教育も不可欠ですね。

この問題を考える時、思い出すのは、4,5年前の国慶節に、前門へ出かけた折の光景です。正陽門の周りに芝生の広場があり、芝生の中を1.5m程の歩道が走っていて、人々がひしめくように歩いていたのですが、急に人の歩みが止まってしまいました。

どうやら前方で人の流れが衝突して動かなくなっていました。芝生の中の道では人の列が全く動かないのですが、芝生の向こうでは人の波が動いています。芝生には立入禁止の札がありますが、柵も何も無いので、ヒョイと芝生に入って向こう側へ行きたくなりますが、芝生の中で係員が見張っているの大人しく待っていました。

ところが、5分経っても10分経っても人波は動く気配がありません。すると少し後ろの方にいた5人連れが芝生を歩き出しました。当然、係員が飛んで来て、列に戻るよう注意しますが、相手は5人で制止を無視して進みます。

係員が中の一人に的を絞って前進を阻んでいる間に他の4人は渡り終えてしまいました、残された一人は仲間の後を追おうとするのですが、係員もこの人だけは通すまいと意地になっているようで必死の攻防戦を繰り広げました。それを見ていた人々が、どんどん芝生に入り込み、もう係員がどんなに頑張っても制止できない状態になってしまいました。

この出来事で、北京の人の力——人の数の力を見たような気がしました。このパワーで、赤信号の交差点を堂々と渡ってしまうのです。でもこの力、不便を感じなければ発揮されません。これからの北京では、人々への教育と、設備・ルールの整備によって、数を頼んだ不法行為が見られなくなることを期待します。

世の中には時に非常に堅物で真面目に誠実に仕事を進める人がいます。しかし鬼の心でひたすら職に忠実であるゆえに周囲と摩擦を引き起こし、その結果が自分に降りかかってくることもあるのです。昔の中国の役人にも、正にその典型的な人物が居りました。今回はそのような人物のお話です。

鉄石心腸について、辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲三省堂 大辞林：

鉄石心腸：鉄心石腸に同じ。鉄心石腸。「外界の物に影響されない、かたい心。」

▲小学館 中日辞典：

「鉄石心腸 tiě shí xīn cháng 冷酷で物に動じない心。鉄心石腸。」

この成語の出自は「隋書¹⁾・敬肅伝」の「称肅曰：“心如铁石，老而弥笃”」（肅という人間は”気性は鉄石の如く堅く、

老いてますます忠実である”）の部分です。

公元604年、後に隋の煬帝³⁾となる楊広は、父である文帝の死後、皇帝に即位しました。そして即位を機に司隸大夫（検察の仕事が所管の官職名）の薛道衡に命じて、全国の役人について、その実態を詳しく調査させました。

薛道衡はきめ細かくいろいろな角度から役人の人柄や仕事振りを調べた上で、各役人の評価結果を煬帝に上申しました。

その中で衛州の司馬（官職名）・敬肅の評価を「敬肅の気性は鉄石のように堅く、老いて益々忠義の心で朝廷に仕えている」と報告しました。このことから煬帝は敬肅に対して、十分信頼できる人物との心象を得ました。

ところで、ここに宇文述という煬帝に仕える大臣がおり、彼の郷里は敬肅が管轄している衛州にありました。宇文述は絶えず人を送って敬肅に書簡を届け、その書簡には「郷里の衛州に居る自分の親戚や友人達をどうかよろしくお願ひ致します」というような敬肅への依頼が書かれていました。

敬肅はそれらの書簡に当初は目を通していましたが、その後はその書簡を受け取っても、毎回封も切らずに直ちに送り届けてきた人に返してしまっていました。手紙を托された人は宇文述の叱責を恐れ書簡を返されてしまっていることを報告しませんでした。

一方、宇文述の衛州に住む親戚や友人達は、宇文述の気持ち汲んだ敬肅が自分たちを庇ってくれるものと思ひ、勝手気ままに振舞い、悪事を重ねて衛州にいろいろ損害をもたらしました。

宇文述からの度重なる頼みが手紙に書かれていたにも拘らずそれらを読んでいない敬肅は彼らを逮捕し、彼らの



挿絵：イェリン 葉霖/紹介7p

悪事を詳しく調べあげた後、投獄してしまいました。この事実を知り、自分が無視されたと思って激怒し、敬肅に恨みを抱くようになった宇文述はそれ以来、煬帝の前で事有るごとに敬肅の悪口を並べ立てました。

煬帝は本来は薛道衡の報告による敬肅の仕事振りから太守に昇格させようと思っていたのですが、傍らに仕える宇文述がことごとく反対するので、この考えを翻意して敬肅の昇格は見合わせてしまったということです。

敬肅はその鉄石のような強い気性を以って忠実に仕事に励んだのですがそれがもとで却って皇帝の信頼をも失うことになってしまいました。敬肅の正しい姿勢は正しいながらもなかなか人に伝わらず、その謹厳実直で融通の無さが災いしたということでしょうか、今昔を問わず世渡りは難しいものですね。

■注記

- 1) 隋書(ずいしょ)：は、二十四史伝²⁾の一つで第13番目にあたる。中国史の中における隋代を扱った歴史書。
- 2) 二十四史(にじゅうし)：中国の王朝の正史24書のことである。伝説上の帝王「黄帝」から明滅亡の1644年までの歴史を含む。
- 3) 煬帝(ようてい)：(569～618)中国、隋の第2代皇帝(在位604～617)。即位後は万里の長城を修築したり、万里の長城とあわせて世界の4大古代工事と称される京杭大運河完成させるなど、盛んに大規模な土木工事を行った。

●注記の出典

- 1) 2) フリー百科事典「ウィキペディア
- 3) 「Yahoo! 百科事典」より

八仙の中に、後ろ向きにロバに乗っている奇妙な老人がいます。この老人は姓を張、名を果と言ひ、見るからに相当な年恰好なので人々に張果老と呼ばれていました。しかし、張果老の実際の年齢を知る人は誰もいませんでした。

自分では堯^{ぎょう}の時代に生まれたと言っていますが、民間では張果老は実は人間ではなく天地開闢^{かいびやく}以前から存在していた白蝙蝠の精で、不老不死の術を修め施す法力を身につけた神ということになってます。が、中国の古典として知られた「唐書」には、張果老は確かに存在した人物として記録されています。

言い伝えでは、唐の太宗皇帝(626年～649年)や高宗皇帝(628年～683年)は長生の方法を知りたいと思い何回も張果老を宮中へ呼びました。しかしその都度謝絶され果たせませんでした。また女帝・武則天^{ぶそくてん}(623年～705年)の時代にも仕官の道を用意し呼び寄せようとしたのですが、張果老は腐乱死体となって見つかったので、張果老は死んだと信じた武則天はあきらめざるを得ませんでした。しかし、それから暫くして人々は山中で死んで見付か

ったはずの張果老を見かけたそうです。また、張果老は唐の玄宗皇帝(685年～762年)の招きに応じたことがあるそうですが、その時の姿は髪も薄くなり歯もすっかり失ったよぼよぼの老人の姿で皇帝の前に現れ、皇帝がその姿に吃驚して、

「そなたは不老不死と伝え聞いているが、どうしてこのような姿なのか？」

と訊ねました。すると張果老は答えて

「わしは、人がいうような道術など使用してはいない。しかし、この髪と歯を抜けば新しい毛と歯が生えてくるのじゃ」

というや自分の髪と歯を抜き始めました。そして、暫くたって顔を見ると既に黒々とした髪、白い歯になり、容貌がすっかり若返っていたということです。

唐玄宗が狩猟に行き、大きな鹿を捕獲しました。厨房にすぐ料理をするように命じたところ、それを知った張果老は「これは仙鹿だ。既に千歳になっている、その昔、漢の武帝もこの鹿を捕獲したが、結局放したものだ」と忠告しました。玄宗が不思議に思い、

「天下は広い、鹿も沢山いるではないか。なんでこの鹿が漢の武帝が捕獲した同じ鹿だと分かるのか」

と訊ねました。張果老は、「武帝が放した時、鹿の耳の下に銅の札をつけて標にした」と答えました。

玄宗が鹿の耳を調べてみますと確かに彼の言う通り、銅の札が付けれられており、文字も長年を経たもののおぼろげに

なってしまう読みとれません。

玄宗は再び、「漢の武帝が狩猟したのは何時なのか」と訊ねました。

「八百五十年前のことだ」

と張果老が答えましたので玄宗は人に史書を調べさせてみますと確かにそのような事実があったようでした。

さて、張果老のロバですが、それも「仙驢馬」と伝えられ、一日に万里を走ることができ、張果老



が乗らないときは、折り畳んで袋にも入れられる
そうです。ところで、張果老は後ろ向きに口バに
乗っている姿で描かれますが何で後ろ向きに乗る
のでしょうか。

実は張果老は元々後ろ向きに驢馬を乗っていた
わけではなく、それは或る賭けに負けて以来の
ことなのです。

その賭けというのは次のようなものです。

今の中国の河北省には世界最古と言われる有
名な石橋・「趙州橋」²⁾が当時の姿のままで残され
ており、歴史的にも名高い大工・魯班^{ろはん}の傑作とし
て知られています。

ある時、魯班が一夜でこの趙州橋を建てたとい
う話が広く伝えられました。張果老はそんな巷の
噂は信じられないと思い、驢馬に乗って趙州に向
かっていきました。その途中、柴を積みあげた一
輪車を押していた柴王爺という仙人仲間に出会
い、二人一緒に「趙州橋」を見に行きました。

趙州の洹河^{しょうが}の畔に来て見ると、噂の趙州橋は龍
のような、力強く迫力ある姿ながら川面に映る影
は虹のように優雅です。

「さすがに魯班だ。これは正に奇跡じゃ！」

二人の仙人は大変感動しました。そして魯班の
実際の腕前を確かめたいと思い、魯班のところへ
行き張果老は訊きました。

「この橋はとても丈夫だと聞いているが、わし
が驢馬に乗って通ても大丈夫かな？」

と魯班は、

「いいとも。この橋は千軍万馬が通ってもびく
ともしない。驢馬も車も人もみんな一緒に通っ
てみてはどうだ」

と自信満々に答えました。その答えを聞いた
張果老は、

「なんと傲慢な若者め、ひどい目に会わせてや
ろう」

と考え、次のような賭けを提案しました。

「よし！では、賭けをしよう。もし我等二人が
無事に通ったら、わしはこれから驢馬に後ろ向き
に乗る。しかし橋が耐えられないで崩れたら、お
ぬしは二度と大工の仕事をやらないというのは

どうじゃ？」

魯班はもちろん豪快に応じました。

二人の仙人は橋に向かって足を運びながら、こっ
そり法術を施し、張果老は月、太陽、星を集め袋に
入れ、柴王爺は五岳名山を袋に納めて一輪車に乗せ
橋を渡り始めました。橋の真ん中までもうすぐのと
ころで、流石の橋も揺らいできました。

魯班は「これはまずい」と思うと、素早く川に
飛び込んで、腕一本で橋を支えました。橋はしっ
かり立ち直りました。張果老と柴王爺が橋を通
し振りかてってみますとなんと橋は依然元のまま堂
々と立って傷一つありません。張果老は負けを認
めて、以後、後ろ向きに驢馬に乗るようになったとい
うことです。

(続く)

■注記

- 1) 堯(堯、ぎょう)：中国神話に登場する君主。姓は伊祁(いき)、名は放勳(ほうくん)。陶、次いで唐に封建されたので陶唐氏ともいう。儒家により神聖視され聖人と崇められた。(フリー百科事典『ウィキペディア』)
- 2) 趙州橋：河北省趙県の洹河^{しょうが}に架けられた橋で、隋代に建てられ、1400年の歴史を持っている世界最古の石橋として知られている。話によると今も張果老と柴王爺が橋を通った驢馬の足跡と車輪の痕跡が残されているといわれる。

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして 入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。
おたより会費の納入をよろしくお願
いします。年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。
文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

▲入会はいつでも歓迎しています。

▲活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。問合せ：042-734-5100(事務局)

今月の農民画は「花傘」。

画面いっぱいに色とりどりの傘が咲き、パツと心も明るくなりそうです。

傘をさす人が雨の日も華やいだ気分でいられますように。。。

絵付けの女の子はそんな気持ちでしょうか。

模様がなくても充分用の足りる傘に花模様を描き入れるというのは、その手作業をする人の気持ちも豊かにしてくれるような気がします。

中国の江南地方の人も梅雨と聞くと、しとしといつまでも降り続く静かな雨を連想するそうです。揚子

江の中・下流域の美味しいお米と梅雨は深い関係があるそうです。

昔から人々に豊かな文化をもたらした恵みの雨です。

雨、雨傘といえば忘れがたい思い出があります。

上海では、私も駐在員妻の例にもれず、週に数回中国語のクラスに通っていました。日本人が数人、韓国人が数人の和気藹々と会話のはずむとても楽しいメンバーでした。担当していた西先生は大学院生で文学青年、若いのにとても気が利くので大変な人気者でした。

ある日クラスのみんなで食事会をした時のこと



懐明富 「花傘」 金山農民画院

です。朝からしとしと雨が降っていたのに、待ち合わせ場所に到着した西先生の手には傘がありません。不思議に思ったずねると、「傘」(傘)は発音すると「sǎn」。その音は「散」という漢字を連想させるから、自分はみなさんとバラバラになりたくないの今日「傘」は持たないで来た」というのです。その真偽のほどはさておき、何て素敵なセリフでしょう。あこがれの先生にそんなことを言われ、私たちはしばし興奮状態でした。

梅雨のシーズン、日常の雨降りはやっかいです。雨音はときにこんな微笑ましい思い出を連れてきてくれます。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

～ 'わんりい' 掲載記事や活動へのコメントなどもお寄せ下さい ～

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報 'わんりい' は、'わんりい' の活動報告や情報の発信と同時に、会員と 'わんりい' 関係の皆さんから頂いた原稿でまとめられた 'わんりい' の広場と思っています。

体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど自由に書いていただければと願っています。その他、'わんりい' の活動や会報への感想やご意見も紙面の許す限り掲載し、わいわいがやがや活気のある

内容にしたいと願っています。てはじめにホンの一言、メール或いは葉書で気楽に送ってみてご覧になりませんか。

*長文の原稿は紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者にご了解を頂き、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのでご了承くださいませ。投稿宛名は、表紙右上をご覧ください。
(田井)



先日、職場の人たちと飲んだ。酔いもまわったところで、誰からともなく新人くんの批判が始まり、気が付けば彼の悪口大会となっていた。確かに、気の利かない感じの子ではあるけれど、私自身は悪い印象を持ったことはなく、「そこまで言わなくても」と酔いも醒めてしまった。

司馬遼太郎全集の解説である本書によれば、司馬遼太郎は、「上のものが新入りの下の者を陰湿にいじめる」のは江戸時代からの「抜きがたい文化」だと指摘している。ちなみに、中国には「**意地悪・いじめる・いびる**」といった漢字・漢語も存在しないようである。

以前、ジェンダーを勉強し始めたら、背景が理解できたため、男性の女性蔑視的な発言が気にならなくなった、と言った人がいたが、私も同じように納得した。

なるほど、江戸時代からの「抜きがたい文化」なのね。しかも、その「文化」は、もともと徳川家のもので、た

また徳川家が三百年間トップに立ったことで、日本人の性格として定着してしまったわけで、もし豊臣家や織田家が天下を取っていたら、また別の日本人のキャラクターができあがっていたという。

さすが「司馬遼太郎エッセンス」のタイトルどおり、ストーリーに気を取られて、読み過ぎてしまう司馬遼太郎作品のテーマや鋭い指摘を取り出して紹介している。

例えば、中国への視点は、この国の農業条件から。

中国の農業条件はさまざまで、「もし旱魃がおこれば雑草も生えないという状態が相当な広地域でおこる」。そのため、人民を食わせる、ということが為政者に切実に求められる。

「五万人の流民を食わせる能力の者は五万人だけの勢力を張るが、しかし流民が風を望んで殺到しついに十万人までになると、その英雄の能力が破綻する。英雄は夜逃げするか、あるいは百万人を養う大英雄のもとに流民ごと行ってその傘下に入れてもらわなければならない」。

その最終段階が、たとえば項羽と劉邦の決戦だという。

そして、「すみずみまで人民を食わせてゆくこと」という政治の大原則は、現在まで脈々と引き継がれている。

水が豊かな日本では、ちょっと想像の付かない根底であるがゆえに、日本には中国が理解できない。「中国はわれわれの理解を絶したほどの異国」であり、同じ価値観のものさしでは、けっして測りえない存在なんである。

(真中智子)

【イラストレーター・^{イエリン}叶霖さんのこと】

今月号の「四字熟語」ページに、地図以外で初めてイラストが入りましたね。

このイラストは、「わんりい」にも時々、文章を寄せてくださる、中国水墨画家・満柏氏夫人の叶霖さんが「わんりい」のためにボランティアで描いてくださったものです。

叶霖さんは、中国撫順生まれで、魯迅美術大学グラフィックデザイン学科を卒業後、雑誌の美術編集者としてお仕事をしていました。1991年来日、千葉工業大学の研究生を経て、企業の宣伝部に勤務した後、デザイナー、イラストレーターとして活躍。「東京ガス総合カタログ」の表紙イラストシリーズなどを手がけました。

満柏先生の展覧会の折に叶霖さんのイラストを拝見、彩りの美しい伸び伸びとした筆づかいが魅力的でした。

2006年1月に待望の双子男児赤ちゃんのお母さんになり、育児で大きな絵は描けなくなったとのことですが、育児書などのお仕事の傍ら、双子の坊や達のためにキャラクター弁当を作られて、私はその写真を頂い

たりしていました。手の込んだとても楽しいお弁当で、本当に食べてもよいのかと心配したくなる芸術性あるお弁当です。

今年5月、ヤフーの、日本語と中国語、両ブログにそのキャラクター弁当のことを載せ始めたところ、日本では、キャラクター弁当コンテストで、優秀賞(第2位)を獲得されました。

また、中国では、親子コミュニケーションと食育テーマの投稿で、1万3千のアクセスを集め、中国のNo.1と言われる育児雑誌で、国家級と言われる雑誌の「父母必読」、「学前教育」、「嬰兒画報」3社から連載や掲載などの連絡があるそうです。

下記は叶霖さんのお弁当掲載の楽しいブログのアドレスです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/yenvshi/GALLERY/gallery.html>



フィールドノートの走り書き①

中国・陝北の剪紙、フィールド・延川との出会い

丹羽朋子(にわともこ)

はじめにあたり

私 が文化人類学の調査のために、初めて陝北の地を踏んだのは2008年の初めでした。陝北は、陝西省の北部、黄土高原に位置する延安を中心とする地域です。以来、剪紙(切り紙)をはじめとする民衆芸術が、ここ黄色い大地の住まいの中でいかに育まれ、20世紀中国の激動の歴史の中でさまざまに姿形を変えながらも人々の暮らしに寄り添い続けてきたのか、自分の目と体で一つ一つ確かめつつ、考え続けています。

一般的な文化人類学の調査の中心は、一定期間その土地で一人の生活者として暮らしながら行うフィールドワークです。

私も延安市北部に位置する延川県を拠点に、この地域の伝統住居である「窑洞」に住まい、寄宿先の家の農作業や子守を手伝いがてら、ゆっくりゆっくりと調査を継続しています。2～3カ月間の現地調査を重ねて滞在はすでに一年を超えました。“ポンズ(朋子)”こと、お団子頭の私が常にカメラを引っ提げて誰彼かまわず質問攻めにする姿も、土地の風景に馴染みつつあります。

この度、これまで私を厳しくも暖かく迎え入れ、研究協力してくれた“陝北朋友”達に感謝を込めて、彼らとガチンコで向き合ってきた日々の暮らしを紹介したいと考え、筆をとりました。題して、「フィールドノートの走り書き」。学术论文では削ぎ落さざるを得ない、でも実は陰影のように並走しているはずの、調査する私自身の徒然なる体験記です。

今月はちょっとした見取り図代わりに、私と陝北の剪紙、そしてフィールドの“家族”たちとの出会いから始めます。

暮らしに息づく剪紙を求め、陝北・延川へ

最初に私と陝北の剪紙との出会いは、現代美術関連の仕事をしている友人から見せられた、一冊の展覧会図録で

した。それまで中国の大都市で見かけた剪紙は吉祥図案を精巧に切り出した工芸品くらいの印象しかなかったのに対し、この本に並べられた剪紙は全く違っていました。

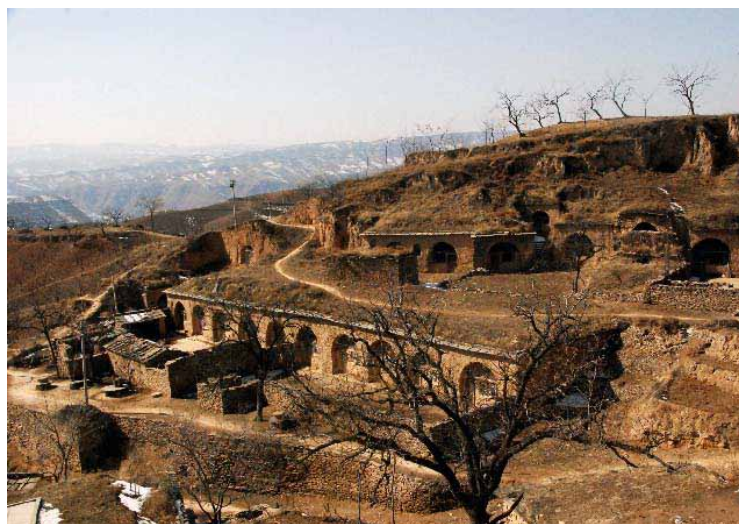
紅い紙の塊そのもののような人形^{ひとがた}、たどたどしい線で切り出された表情豊かな動物たち、見る者の理解を阻むような奇怪で繊細な造形……どれとして同じものはなく、紙という脆く軽やかな素材でありながら、必死に言葉を投げかけてくるような力強さと親しさをもっていました。

本の名は『延川県剪紙大普查』。読めば、2004年に北京の芸術家の主導で、延川県という人口17万人の小さな県で剪紙の全村調査をするというアートプロジェクト

が行われ、その際、突然鉄を渡された多くの村人たちが紙から剪り出し、集められた1万5千点もの剪紙が上海トリエンナーレの展示を飾ったといいます。

当時、新たな研究対象として、「工芸」や「芸術」の一手前にある、暮らしの中の手仕事を探していた私は、一瞬でこの小さな剪紙群に心奪われ、剪り手に会いたい一心で中国に向かいました。

陝北への初旅は、お正月飾りとして剪紙が窓に貼られる春節の時期を待って敢行しました。例の本を手掛かりにまずは、このプロジェクトを企画、運営した芸術家集団「長征計画」に会うべく、中国現代美術のメッカ、北京の798



窑洞(ヤオトン)が点在する陝北・黄土高原の風景



剪紙作者の「档案」

芸術区を訪れました。古い工場を改装した巨大なギャラリーでは折よく、彼ら芸術家集団がこれまで取り組んできたアートプロジェクトの回顧展を開催中で、その一角にインスタレーションされた「延川県剪紙大普查」を見ることが叶いました。

その展示で白い壁一面を覆い尽くしていたのは、おびただしい数の、剪紙を切った人々ひとりひとりの「档案」でした。貼りだされた各「档案」は、氏名や年齢、住まいや経歴、生業や経済状況などが表に書き入れられ、加えて作者の写真と剪紙の実物が貼られた個人文書です。その他に調査過程を撮った写真や動画、調査者の感想文等、様々な素材も美しく布置されていました。

一方、私は、小さな写真からわずかに垣間見える調査当時の現場の熱気とは裏腹に、剪り手のひとりひとは、貧しい農民や文盲の老女として分類され、経済発展へのアンチテーゼやいわゆる「芸術」に抗するための民衆芸術という記号になってしまっているような、そんな切なさも感じてしまいました。

展示を見て、なおさら現地に赴き、この目で確かめたいという思いに駆られた私は、芸術家たちに直談判し、初めは断られたものの、通うこと3日目にしてとうとう延川にいる現地の協力者を紹介してもらえることになりました。

翌日、「馮奮^{フォンフェン}」というその人物の携帯電話番号だけを携えて、恐る恐る延安行きの夜行列車に飛び乗りました。もちろんその時は、愚かにも陝北がどんな場所なのか知りもせず、ましてやその後、自らが馮奮^{フォンフェン}家の居候として御厄介になろうとは夢にも思いませんでした。

延安が近づくにつれ、窓外の風景は黄土高原の険しい山谷の合間に、切り立った山肌を穿った横穴式窑洞が無数に点在する黄色い大地へと変わっていきます。「革命の聖地」という枕詞が付きまとう、共産主義革命期の真っ赤なイメージに染まった場所、延安。列車とバスを乗り継ぎ延川へ。ようやく長距離バス乗り場に辿り着くと、陽によく焼けた丸刈り小太りの陝北男性が、ニコニコしながら近寄ってきます。そう、馮奮さんです。

「ポンズ、今日来た君は本当に運がいい。今夜はある農村に、昔ながらの“転九曲”という儀礼があって、うちの家族みんなで見に行くんだ。急ごう」

わけがわからぬまま車に乗り、辿りついた先は、農作物を刈り取った後の畑にともった無数の光。近づいて見ると、それは1年を表す365個の灯を灯した木杭を立ててつくった迷路のような道筋があります。

驚く私をよそに、にぎやかなドラや鼓笛の演奏が鳴り響き、思い思いに着飾った秧歌を舞う村人たちの2つの隊列が、右から、左から向かってくるではありませんか！女性たちの手には、お手製の小さな剪紙を貼って作った花灯籠。かわいい動植物の図柄が踊りに合わせてくるくと

回っています。両隊列は迷路の入口で向き合うと、それぞれ先頭にたつ男性が、さした花傘をくるくる回しながら、歌の応酬を開始しました。

即興の歌が山々に木霊して——真っ暗な大地に蛍の群れのような光が揺れる中、歌と踊りは深夜まで続き、私も次第にその渦の中へ巻き込まれて行きました。それは初めて、剪紙が“生きている”！と確信した瞬間でした。こうして、延川でのエキサイティングな初旅と、その後待ち受ける、日本人としての厳しくも幸運な調査生活は始まったのです。

その後、延川で体験した、厳しい農村の暮らしやそこで生きる人々が駆使する四季折々の行事、そして人生の節目の儀礼。文革期の断絶を経てもなお生き続ける、剪紙など女を担い手とする暮らしを彩る手仕事のあり様、そこに絡み合う民謡や歌垣といった男たちの民衆文化、そしてそれらに魅せられ、単なる政治活動を越えて農民の指導に尽力してきた芸術家との交流の歴史……私が最初に本で見えて感銘を受けた力強く素朴な陝北の剪紙の後には、時間と空間の複雑な支流が絡み合い、黄河に負けずとも劣らぬ大河となって脈々と流れていることが、最近だんだんとわかり始めています。

「長征計画」のアートプロジェクトに触発されて始まった私の旅は、その展示からこぼれ落ちてしまった村人ひとりひとりの生の暮らしに寄り添いながら、今も続いています。



次回の予告：

桑洼村の毛水源おじさんの棗畑と窑洞暮らし

剪紙を育んだ陝北の農村生活を調べるべく、私は最近まで、桑洼村という辺鄙な農村の毛家^{マオ}に寄宿していました。棗の樹を精魂込めて育てる毛水源おじさんは、農村暮らしや激動の歴史を教えてくれる、私の一番の師匠。次回はこの村での生活や、彼をはじめとする村の人に協力してもらい撮影した映画づくりについて書きます。

丹羽朋子(にわともこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。大学卒業後、インテリアデザイン会社 IDEE に勤務。その間、北京・清華大学美術学院に留学。退職後、現在は中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に着手。著作に「願いを託すかたち、缺で伝える心—中国・黄土高原に咲く剪紙の花」(『季刊「銀花」』第160号、文化出版局)、監修書に『中国の蝶』(下中菜穂著、エクスプランテ)等。

- 丹羽朋子さん制作のビデオ上映会
6月27日(日) 14:00、町田市民フォーラム・視聴覚室
- *詳細は、18p'わんりい' 掲示板又はチラシをご覧ください。

カンボジアの村の暮らし (その2)

川口洋一 (NPO団体「カンボジアこどもの家」会員)

‘わんりい’ 6月号は、村の暮らしに欠かせないお寺と市場をのぞいて見ましょう。

【お寺】(表紙を参照下さい)

6月号の‘わんりい’の表紙はカンボジアの村のお寺でお坊さんに祝福を受けている場面ですが、お坊さんも、お参りに来た人も若い人が多いようです。

村の生活はお寺と深くかかわっています。朝5時頃、あたりが薄明るくなるとお寺から読経の声が聞こえてきます。大勢のお坊さんがお経を読んでいるからでも、お寺に近いから聞こえてくるのでもありません。拡声器で増幅してガンガン流しているのです。ですから村の人たちはみんな早起きです。日本人もみんな早起きになります。

毎週土曜日には正装して家族そろってお寺へ出かけます。何段にも重ねたお弁当箱にいろいろの食べ物を詰めてもって行きます。お寺の厨房には大きな入れ物がいくつか置かれています。もっていったお弁当の中身をその中に入れます。何かの基準で入れるべき入れ物が決まっているようですが、よく分かりません。

それらはお坊さんがお祈りをしたあとで食べるのです。托鉢の逆バージョンです。寄付された物やお金はお寺のためにも使われますが、貧しい人のためにも使われるとのこと。お寺は社会保障の機能を担っています。

同じような柿色の衣を着たお坊さんですが、本当に仏門に帰依して修行をしている人もいれば、仕事がなく食べるためにお寺に来た人、裕福で余裕があるのでステータスシンボルとしてお寺に入って修行をしている人、いろいろのようです。家々を回って托鉢をしている小坊主さんを良く見かけます。どの家でも貧富に拘りなく何ほどこかを差し出しています。そんな風景を見ていると平和だな～とってしまいます。

日本と違って9月の初めがお盆です。何度目かの訪問のとき「こどもの家」のカンボジア人スタッフに



アプサラダンスの練習をする女子生徒

課外授業でカンボジアの伝統舞踊「アプサラダンス」の練習をする女学生たち。上手な生徒はプノンペンの国立の舞踊学校に推薦される。

カンボジア王国バンテアイミエンチェイ洲ツールボンロー村の小学校

2005年9月3日 撮影：川口洋一

「今晚、お寺でダンスがあるから行きましょう」と誘われました。当然日本の盆踊りのようなカンボジアの伝統的な踊りが見られるものと思って喜んで付いていきました。行ってびっくり、見てびっくり。

お寺の境内に自家発電装置を持ち込んで、大きなアンプのボリュームをいっぱい上げて、若い人に人気のあるロックミュージックやカンボジアのポップミュージックのCDをかけて、若い人たちが踊っているのです。まったくの野外ディスコです。その周りで孫を抱いたお年寄りがニコニコとすに座っているのです。あっけにとられてたって見ていると、親切な男の子がイスを持ってきてくれました。

後で聞いたところでは、都会は別として村では年頃の男女の交際はかなり厳しく規制されていて、親しげに口をきいたりするものはばかれるようです。ですからお寺のダンスパーティーは男女が気兼ねなくお付き合いできる数少ない機会なのだそうです。

【市場】

村にも小さな商店が並んでいる通りがあります。毎日の食材を少しずつ買うには良いのですが、品数は多くありません。車で30分ほど走ると国境の街ポ

イペトの市場です。市場はブロックごとに分かれていて、食料品ブロックには穀物、野菜、果物、魚、鶏、豚を扱う専門店がそれぞれ数軒ずつ狭い道を挟んでのきを連ねています。同じように衣料品のブロック、雑貨のブロックさらには貴金属・宝飾品のブロックもあります。

物は種類も量も豊富で、お金があれば何でもそろいます。値札は表示されていないので、相対で値切り交渉です。観光地になっていないので、外国人と見て法外な値段を吹っかけるようなことはしません。

屋台も出ていて、氷を入れたサトウキビの絞り汁やココナッツミルクを売っています。冷たくておいしいのですが、飲んだら一発で下痢症状、悪くすると肝炎にかかってしまうので、我慢して冷たい缶ビールで喉を潤します。

村の人たちも4月のお正月の前やお盆の準備には町の市場へ買出しに行きます。多くの村人の足は、バイクタクシーです。大勢で出かけるときはサムローと云う150ccぐらいののバイクに日除けの屋根をつけたサイドカーを取り付けた乗り物を使います。

サイドカーには大人6人ぐらい詰め込んで走ります。もちろんスピードは余り出ません。時速10キロか15キロ程度です。そんなスピードでも外板のないオープンスペースなので風が流れて行き自動車に乗っているよりも快適です。 (続く)



市場への足・サムロー

村人の交通手段はもちろん足です。でも街に行くときは一人、二人ならばバイクタクシー。それよりも大勢ならば150ccぐらいのバイクにサイドカーを付けた、このサムローを利用します。大人6、7人乗せます。走ると風が通り涼しいです。

カンボジア王国バンテアイミエンチェイ洲ツールボンロー村の大通り
2005年9月4日 撮影：川口洋



ガソリンスタンド

村のガソリンスタンドです。コカコーラのペットボトルにガソリンを入れて売っています。そばで平気な顔をしてタバコをすっているのにはびっくりです。

カンボジア王国バンテアイミエンチェイ洲ツールボンロー村の大通り
2005年9月4日 撮影：川口洋

【6月の歌】

xi ngji n de xi olù
乡间的小路

叶佳修：诗曲

zǒu xiāngjiān de xiǎolù shàng
走乡间的小路上、
mù guī de lǎo niú shì wǒ tóngbàn
暮归的老牛是我同伴、
lántiān pèi duǒ xīyáng zài xiōngtáng
蓝天佩朵夕阳在胸膛、
bīnfēn de yúncǎi shì wǎnxiá yīshang
缤纷的云彩是晚霞衣裳。

xiàoyì xiě zài liǎn shàng
笑意写在脸上、
hēng yī qǔ/xū xiāng jū sù ài chāng
哼一曲乡居塑爱娼、
rèn sīxù zài wǎn fēng zhōng piāoyáng
任思绪在晚风中飘扬。
duōshao jì mò chóuchàng
多少寂寞惆怅
dōu suí wǎn fēng piāosàn
都随晚风飘散、
yíwàng zài xiāngjiān de xiǎolù shàng
遗忘在乡间的小路上。
mù guī de lǎo niú shì wǒ tóngbàn
暮归的老牛是我同伴、

zǒu xiāngjiān de xiǎolù shàng
走乡间的小路上、
mù guī de lǎo niú shì wǒ tóngbàn
暮归的老牛是我同伴、
lántiān pèi duǒ xīyáng zài xiōngtáng
蓝天佩朵夕阳在胸膛、
bīnfēn de yúncǎi shì wǎnxiá yīshang
缤纷的云彩是晚霞衣裳。

住み込んで働いていた孤児院内に保育園があり、ある日その保育園へ初めて行くと保育園の先生から「はい」と渡されたのは50センチくらいの丸い木の棒だった。「子供が悪いことをしたら、これで叩いてね」と笑顔で言う。

保育園には、2歳くらいの子供から6、7歳の子供まで、異年齢児がトタン板1枚で覆われた屋根の下、15～20名くらいが毎日午前中だけ通っていた。日本ではいろいろな年齢の子供達と一緒に保育を受ける「異年齢児クラスあり」がその保育園の売り文句として特徴づけられたりするが、ここでは、地域の「普通の月謝が払えない子供」の保育園であるため、貧困家庭からいろいろな年齢の子供が集まっているに過ぎない。日本円で400円ほどの月謝で入学できる。普通の保育園は少なくとも、2000円以上はするので相場から比べるとはるかに安い。NGOが主催している保育園だからだ。

クラスには小学校へ行ってもおかしくない年齢の子供が結構いる。子どもたちの受け答えも、先生とのやりとりも保育園児のそれではない。普通ケニアの子供達は、家庭ではそれぞれの部族語を話し、保育園のようなところに来て初めて、ケニアの国語であるスワヒリ語で他民族の友達と話すようになり、保育園では授業は英語を使用し、先生とも英語で話す。2歳から通い始めた子供も、2、3か月もすれば、スワヒリ語と英語を使って生活できるようになる。そこへ、英語もスワヒリ語も中途半端な私がアルファベットや数字を教えることになっていた。逆に私が子供に教わらないといけなような状況だった。

「muwarimu (先生)、sema pole pole, tafhadari (ゆっくり話してください)」とまっすぐに手を伸ばして手を挙げ、先生に指名されると立って発言する。先生に自分の書いたノートを添削してもらったときも、きれいに並んで私語はしない。離れたところにあるトイレに行くときは駆け足で行って帰ってくる。

初日からそのしつけの行き届きぶりに私は驚いた。先生の号令に従って、きびきび動く、下は2歳から上は7歳くらいの子供達、小さい子がもたもたしていると、それを手伝ってあげない大きい子が代わりに怒られる。教室には、先生の「haraka, haraka (急いで、急いで)」が常に響き渡る。初日から「polepole (ゆ

っくりゆっくり)」な生活をイメージしていた私は、その目まぐるしい展開に驚いた。

そんなしつけをする保育士の先生は、30代の、自身も2歳の子供がいる若い先生。1人で、そんな大人数のしかも年齢の違う子供達を一手に面倒見ている。そして外国から来た私にも保育のいろはを日々教えてくれた。それはもう「厳しい」の一言に尽きるといえる。笑顔はほとんどない。教えるとき以外は、指示するか、怒るか、叩くかのどれかだ。

そして大活躍の木の棒。子供が何かすると、手の甲やおしりを思いっきりバシッと叩く。この木の棒は、振り上げるときにしなるので、バシッと叩かれた後は腫れる。涙がす～と自然に流れてくるほど痛い。悪いことをするたび一日に何度もそうやって叩かれるし、友達が叩かれるのを見ていると、子供達はどんどん恐怖感を募らせて、否応なしにしつけられていく。

ケニアでは「体罰」は法律上禁止されていない。教育の一環として教師に与えられている。先生は子供をしつける義務と責任があり、そのために体罰を与えるのである。しかし、日本から来た私は、子供をしつけのために常に叩くということにとっても抵抗があった。しかも右手に常に棒を持ちながら、すぐ叩く先生を見習うのはとても抵抗を感じていた。

忘れ物をしては叩かれ、遅いといったら叩かれ、友達と喧嘩して叩かれ、子供は1日に本当に何度も叩かれていた。そうして先生は恐れられ、子供は大人の前では別人のように静かに振舞うようになっていく。

しかし、なかなか叩けなかった日本から来た私。すぐに叩かない人イコール先生ではない、大人ではないと認識されて、私を遊び相手と考えるようになった。立っていると、手を繋いでくるし、休み時間は「遊ぼう」と誘ってくるようになった。そうこうしていると、保育園の先生に言われた。

「先生になりなさい。叱りなさい。叩きなさい。むやみに笑顔を子供に見せない。出来る？」その日から先生は、私を先生にするべくいろいろなアドバイスをした。友達から先生に急に方向転換した私を子供達はあっさり「先生」として受け入れてくれたかどうかは分からない。

忘れ物をした子供の手のひらを棒で叩いたのを皮

切りに、一日中怒り、叩きの繰り返し。ケニアで先生になるって大変だ。今でも棒切れを見ると、思い出してしまう。叩いた子供達の手のひら、おしり。思わず流れ出る涙。「ごめんなさい」という声。私はそれぞれの子供達の置かれている環境を思うとき、叩くことがその子の為になるのかと考えて込んでしまっていた。

朝食も食わず、何キロもの道を1人で歩いて来る子、母子家庭で、その上お母さんがアルコール中毒、弟妹が5人いる長女の子、学費が続かず、月によって保育園に通えたり通えなかったりする子、かばんがなくて、いつもスーパーの袋に勉強道具を入れてくる子、穴のあいたセーターと途中で引きちぎられたようなズボンをいつもはいている子、栄養が明らかになり足りていなくて年よりもずっと小柄な子。

その教育環境も決して恵まれているとはいえない。大きなノートを複数に切って、数人で使う。鉛筆や消しゴムは大きな箱に入れて共用で使う。長机に沢山の子どもが座る。暗記するときは、校庭に出て土の上に何度も書く。

それでも子供達は、登園するのを心待ちにし、自分の食事は抜いてきてでも、園で飼っているウサギに野菜を持ってきたりする。外国人の私に素敵な笑顔



を見せてくれたりする。大きな子供は小さな子供の面倒を本当によく見る。小さな親のように指導し、見守り、助ける。

こんな環境の保育園でも、親たちは保育園の卒業証書の為に学費を用意する。小学校へ行くには、保育園の卒業証書が必要なのだ。新政権になって小学校は無料になったけれど、入学する為には保育園や幼稚園に行かなくてはならない。先生や大人たちの誰もが社会で生きていく厳しさを知っている。だからこそ、厳しくいつも子供達をしつける。甘えていては誰も配慮してはくれない社会が待っているのだから。

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

黒薔薇の深き黒にはなりきれず

shū jué hēi qiángwēi
殊絶黒薔薇
huāsè wèi dá qū qū hēi
花色未达黢黢黑
nóng yì zú zhēnguì
浓翳足珍贵

季语：薔薇、夏。

赏析：花卉的品种有墨菊、黑薔薇、黑牡丹等、其实这些花色大都是深紫色或紫黑色、目前尚无真正的墨黑。作者大概是慕名观赏这黑薔薇吧！当目睹这盛开的花朵时、似乎有些失望、觉得没有像转言中的那么浓黑。不过、现实中的花朵能达到近似黑色的浓翳已是弥足吃珍贵了。诗作中还流露出一线希望：是不是自己来得过早、花色尚未达到浓黑的程度吧！

散り敷ける薔薇の誇りや香は土に

yān hóng luò mǎn dì
嫣红落满地
rén rén kuā zàn qiáng wēi qí
人人夸赞薔薇奇
fāng xiāng jìn tǔ ní
芳香浸土泥

赏析：我国清朝龚自珍曾在《己亥杂诗》中咏道：“落红不是无情物、化作春泥更护花。”而此首俳句将薔薇落谢时的景色写得有景有意、赏赞“芳香浸土泥”的薔薇之高尚神奇、似与我国古诗有异曲同工之妙。



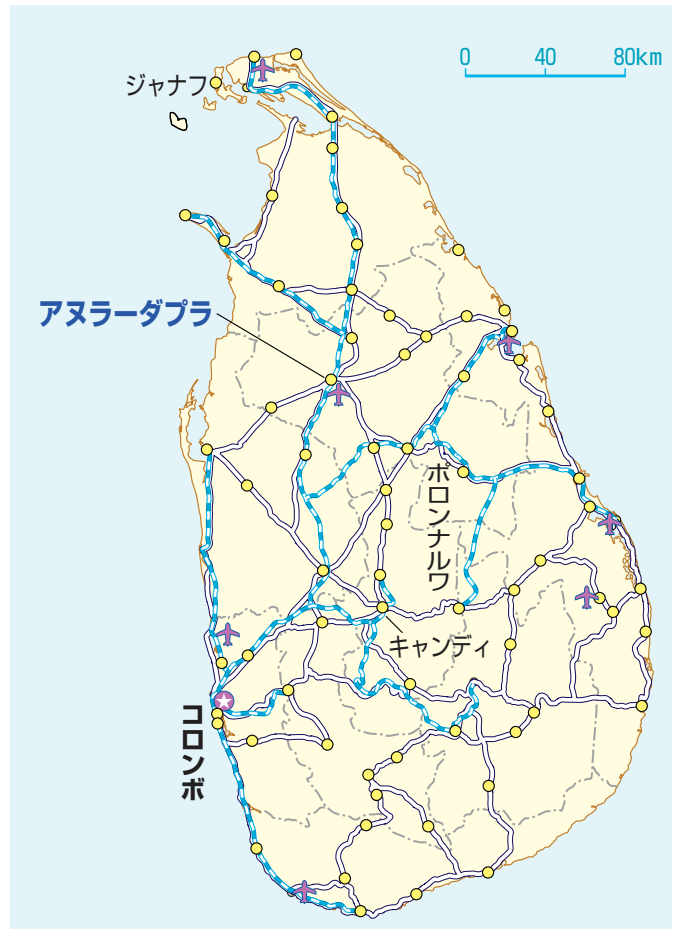
聖地アヌラーダプラ ②

前回はアヌラーダプラの街の歴史を紹介して終わりました。

アヌラーダプラは街の東側の南部が新市街地区、東側の北部が旧市街地区、西側が遺跡地区の3地区に分かれています。更に遺跡地区の西側には貯水池が広がっています。新市街、旧市街とは言っても遺跡地区に比べると遺跡が少ないだけで遺跡が全く無いわけではありません。新市街、旧市街の両方の街には同じ様にバスターミナルや郵便局、レストランがありますが、鉄道や遠距離バスは旧市街に隣り合せて建てられている駅とバスターミナルに着くので、旧市街の方が賑わっているようです。

さて、アヌラーダプラの探検を始めましょう。駅を出て北西に向って約1.5km歩くとアヌラーダプラの三大仏舎利塔の一つで3世紀に建てられたジェータワナ・ラーマヤに着きます。現在の高さは約70mですが建立当時は高さ約120mで頂上には水晶の柱が立っていたと言われます。更に北に約1km歩けば宮殿跡と仏歯寺跡に、西に約1km歩けば三大仏舎利塔の一つで2世紀に建てられたルワンウェリ・サーヤに着きます。現在の高さは約55mですが建立当時は110mあったと言われます。

ルワンウェリ・サーヤから南に約500m歩くと前回に紹介した、インドのブッダガヤから移された菩提樹を祀ってあるスリーマハー・ヴィハーラがあります。



ヴィハーラは寺院の意味です。ここまでは歩いて回れるのですが、三大仏舎利塔の残り一つであるアバギリ・ダゴバは少し離れたところにあります。スリランカでは現在すたれてしまった大乘仏教の塔で、紀元前1世紀に建てられたといわれ現在の高さは75m、建立当時は110mあったとされています。

三大仏舎利塔を見学したら是非とも遺跡地区の南端にあるイスラムニヤ・ヴィハーラを訪れて下さい。通称ロックテンプルと言われているように、アヌラーダプラで唯一の岩山に建てられています。

紀元前3世紀に建立されたアヌラーダプラ最古の寺院で岩山の頂上には本堂、仏舎利塔、宝物館があり、三大仏舎利塔が建てられるまでは一番高い建造物でした。岩山の頂上からはアヌラーダプラの街並み、空に突き出た三大仏舎利塔、広大な貯水池、その後に広がるジャングルが一望で



イスラムニヤ・ヴィハーラ 岩肌には数多くの仏教彫刻が彫られている

きます。ここは遺跡で有ると同時に現役の寺院でもあります。岩山を下ると比較的新しい祠があり、中には極彩色の涅槃仏が横たわっています。この仏像の塗り替えは日本の浅草寺の援助で行われています。

アヌラーダプラを満喫する為には、最初からレンタル自転車を借りて上記の順路に捕らわれずに行き当たりバッタリに旧市街、新市街、遺跡地区をブンブンとサイクリングするのが楽しいと思います。

道に迷っても3大仏舎利塔のどれか1つの頂上が必ず見えるので心配ありません。自転車ならば気に入った場所では好きなだけ時間をかけて遺跡を見て回れます。僕の好みでは、多少道に迷うぐらいの方が、楽しみが増えて良いですね。

ペダルを漕ぐのがしんどい方、時間の無い方はガイド兼任のドライバーが運転するタクシーを雇う事が出来ます。車ならば4～5時間もあれば主だった遺跡を回れるでしょう。三大仏舎利塔を見て回るだけでも、移動の間に数多くの遺跡が点在するので、気になる遺跡があれば停まってもらって見学する事が出来ます。レンタル自転車は1日借りても200ルピー(約240円)が相場ですが、レンタル店によって自転車の当たり外れがあるので数店を覗いて比べてから借りた方が良いでしょう。タクシーは4時間で1500ルピー(約1800円)が相場なので、あとは交渉の腕次第です。

喉が渇いたり、お腹が空いたら、そこら辺のお茶屋さんに入ってみましょう。オーダーの仕方がわからなくても店員さんや先客達が色々と面倒をみてくれます。何処から見ても観光客にしか見えないから気取ってもしかたがありません。誰かが食べているのと同じ物が欲しい時は指差して、同じく指先で個数を示すだけで十分伝わります。

お店に居合わせたスリランカ人たちは、外国人と関わりを持つのが嬉しくて仕方が無いし、こちら以上に好奇心を持ってこちらの一挙一動を観察しています。ほとんどの店は薄暗いので、最初は気付きませんが目が慣れてくると店に居る全員がこちらを凝視しているのに気付くことでしょう。ここ一番の笑顔で応えれば、全員が笑顔で迎えてくれますよ。どうしても、この手のお茶屋さんは苦手だという方も安心して下さい。外国資



水田とジャングルの向うに仏舎利塔が見える。

右側：ジェータクナ・ラーマヤ / 左側：ルワンウエリ・サーヤ
両塔に挟まれ、遠方に小さく見えるのが、アバヤギリ・タゴバ(下の写真)



アバヤギリ・タゴバ 現在はユネスコによって修復工事がおこなわれている。

本の入ったリゾートホテルもあるし、地元資本の小洒落たホテルも何軒かあります。これらのホテルはアヌラーダプラ王朝のあった時代(紀元前4世紀～10世紀)に造られた灌漑用の貯水池というよりは湖に面して建てられているので、テラスで湖面を渡ってくる風に吹かれながら休憩するのも乙なものです。

次回はポロンナルワを紹介します。(次号に続く)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

どうしよう……どうしよう……

少年のバイクを壊してしまった私は夕暮れの近づいた空の下、亜丁村を見おろす峠の上で一人途方にくれていた。だが、そこでいくら思い悩んでいてもどうにもなりはしない。どれだけ考えたところで私にできるのはただ一つ……少年に謝って、バイクの修理代を支払う事だけだろう。

擦りむいた手のひらを庇いながらノロノロとバイクにまたがりエンジンをかけると、ブォンとバイクがうなり声をあげた。壊れた箇所はクラッチレバーだけだったのがせめてもの救いだ。レバーが折れてしまったためにギアが変えられず、先程は元気いっばいに駆け上がってきた坂を、泣き出したいような気持ちでノロノロと下った。

こんな不便な山奥の村で、生活の足ともいえる大切なバイクを壊してしまい、いったい少年に何と云えばいいんだろう……悲しいけれど私にはお金を支払う事でしか償いの方法が無い。修理代は幾らかかるんだろう？ 思わずこれまで自然保護区で出会った村人達の顔が目には浮かんだ。もしあの人達だったら、法外な金額を要求してくるのかもしれないな……。だが少年に申し訳ない気持ちでいっばいの私は、たとえ幾らといわれても喜んで支払うつもりだった。

宿の前に着くと暗い気持ちでバイクを止め、建物の中に入った。宿の台所兼食堂のような空間になっている部屋へ足を踏み入ると、部屋の奥の方では北京チームが宴会をスタートさせている様子だ。亜丁の少年はその手前にあるストーブの前でこちらに背を向け友達と並んで座っていた。

別にコソコソする必要も無かったが、他の人には知られたくなかったので足音を忍ばせて部屋に入り、そっと少年に近づくと背後から小さな声で彼の名を呼んだ。振り向いた少年を「ちょっと来て」と表に連れ出した私は、オズオズと少年をバイクの前に立たせ、折れたクラッチレバーを指し示すと消え入りような声で言った。

「ごめんなさい。私、あなたのバイクを壊しちゃったの……。本当にごめんなさい。お金を払うから、それでバイクを修理して下さい」

審判をうけるような気分で申し出た私に、いったい何事かといぶかしそうな顔をしていた少年は、折れたクラッチレバーを見るとちょっと驚いた様子をした後に笑いながら言った。

「な～んだあ!! こんなたいした事じゃないよ! どうしたの!? 君は大丈夫!?!」

「転んじやったの……」

擦りむいた手を差し出して見せた。

「私は大丈夫。でもあなたのバイクが……」

「あんなのスグに修理できるさ! それより他に怪我は無い? 本当に大丈夫!?!」

「バイク壊しちゃってごめんなさい。修理代を払うから……」

私の申し出に少年は笑いながら手をふった

「お金なんか要らないさ～!」

「え? でも……」

「そんな事心配しないで。友達じゃないか!」

少年に付いて外に出てきた少年の友人も「あんなのすぐ直るから大丈夫だよ」と一緒に声をかけてくれた。

「だけど……」

尚も言いかける私の手をとって、擦りむいた傷を確かめると少年が言った。

「本当に他には怪我してないの?」

私は大丈夫、でもバイクが……」

「君が大丈夫なら、没問題だよ。俺たち友達じゃないか～!」

少年の言葉に思わず涙がこぼれそうだった。

少年達と建物の中に戻ると、すでに宴会がスタートして盛り上がっている北京チームのメンバーが私の姿を見つけて声をあげ、手を振ってテーブルに呼んでくれた。

「おお～、小姐!! 来! 来! 来! 来!(ライ! ライ! ライ! ライ!)」

少年達は先程まで座っていた北京軍団の円卓の脇にあるストーブの前の椅子に腰掛け、私は少年を気にしながらも北京チームに促されて招かれた円卓にオズオズと座った。

「さあ! さあ! さあ!」とすぐさまグラスを手渡され、ビールを注がれて乾杯になり「さあ食べて食べて!」と料理を勧められた。だが私は背後にいる少年が気になって、テーブルの正面を向いて座る事が出来ずにいた。

「彼は私の友人なの。さっき話した美しい湖は三年前に彼が連れて行ってくれたのよ」

私が北京チームのメンバーに少年を紹介すると少

年は笑顔を浮かべたが、北京メンバーの一人が「良かったら君達も一緒に座らないか？」と声をかけても少年達は、「俺たちは遠慮するよ」とテーブルには近寄ってこようとはせず、宿の主人にカップラーメンを注文した。

テーブルに並んだ料理に背を向けてカップラーメンを食べている少年達と、親しげに飲み物や料理をすすめてくれながら話しかけてくる北京軍団の板ばさみのような立場になってしまった私は、テーブルに対して横向きに座り右を向いたり左を向いたりしながら少年達や北京軍と代わる代わる会話する状態だ。本心をいえば、せっかく三年ぶりに再会する事ができた垂丁の友人と、もっとゆっくり話したい気持ちでいっぱいだったが、親切に食卓に招いてくれている北京の人達の気持ちもムゲにはできない辛い立場だ。

「何で君らは俺たちと一緒に食べないんだ？」北京メンバーに尋ねられた少年は、そっけなく一言「口に合わないよ」と答えてカップラーメンを啜っていた。いつもはあれほど人懐こい少年の頑な態度が不思議に思えた。

「ねえ、三年前のハイキングで一緒に歩いた、この村の女の子はどうしてるの？」

私は少年に尋ねた。

あの日、辺り一面にびっしりと可憐な花が咲き乱れる秘密の花園で少年と寄り添い、映画の一場面のようにロマンチックな風景を作り出していた垂丁村の少女の事だ。チベット服に身を包み、切れ長の目をした美しい少女が花園にただずむ姿は余りに可憐で、私には軽い嫉妬さえ感じられた程だった。

急にふられた話題に少年は誰の事なのか一瞬思い出せずにいたようだが、私がある程度説明するうちに「あー！」と手を打ち、「あの娘は彼の妹だよ〜！」と隣にいる友人を指差した。

「え！ 本当〜!? 私、あの娘にも会いたいな〜」

家には三年前の旅で母が写したスナップ写真がアルバムに残されている。やんちゃな素振りの少年や美しい少女がとても可愛く写されている写真が何枚かあった筈だ。こんな事になるならあの写真を持って来ていれば良かったのに。この場で手渡して少年達が喜ぶ顔が見たかった。

それから暫く友達と話合っていた少年が椅子から立ち上がった。

「じゃあ、俺たちは行くよ」

えっ・・・思わず少年の顔を見返す私に、少年は友人を指差すと「これから彼の家遊びに行く事にし

たんだ」と言った。ええ〜!! 私も行きたい〜!!・・・思わず声を上げそうになったが、せっかく手厚く招いて貰っている食卓を食事の途中でいきなり中座してしまうのは、あまりに北京軍の彼らに失礼だろう。

でも、でも、行っちゃうの〜?・・・親が出かけるのに置いていかれる子供のような顔で、少年を見つめていたに違いない私を見返すと、少年は私の心を見透かしたように「また後で戻ってくるよ」と言った。

「・・・うん」ガッカリする気持ちを隠しきれないまま、少年の言葉に説得されたかのような気分では小さく頷いた。友人と連れ立って宿の食堂から出て行く少年は、ドアの前で再び私の方を振りむくと笑顔を見せて出て行った。

後に残された私は、なんだか大切な物を失くしてしまったような気分になっていた。そんな事は露知らずにいる北京軍団は「さあ小姐、食べて、食べて」と料理を勧めてくれている。先程はなんとなく北京軍とは距離を置いている雰囲気少年達だったので、間に挟まれていた私はおちおち前を向いて食事など食べられない気分だったが、話相手が一方に絞られた事で少しホッとした気持ちもあった。

テーブルの上にはギッシリ料理が並び、時折宴会に参加しながらもまだ料理を作り続けている料理長がどンドン新しい皿をテーブルに運んでいた。毎日一人で汁麺ばかり食べていた私には久しぶりの豪華な食事だ。少年の事がまだ胸につかえてはいたが、後で戻ってくるという言葉信じ、とりあえずは北京の人達の食卓に招かれてしまう事にした。

どこか晴れない気持ちを抱えつつも、北京軍団の人達との食事はそれなりに楽しかった。やはり自然が好きで美しい土地をあちこち車で旅行しているという彼らと、互いの旅行話を披露し合い、中国でお奨めの風光明媚な土地を紹介してもらったり、北京のゲストハウスの話を聞いたりしながら宴は盛り上がり、夜はだんだんと更けていった。

私達のグループが宴会で盛り上がっていると、それにつられたように1台また1台と車が宿の敷地に入ってきて次々と新車の客がやってきた。表にとめてある車と窓越しの食堂の様子に引き付けられているのか、庭にいったん車を止めると食堂の窓に顔を押し付けて中を覗きこんでから入ってくる中国人旅行者もいた。

新規のお客たちは荷物を部屋におろすと、食堂にやってきては新たな円卓で宴会を開始するので、次

から次へと入ってくるお客達でいつしか食堂にあるテーブルはすべて埋まってしまい、まるでこの日の垂丁村の客がすべてこの宿に集まってしまったような騒ぎになっていた。宿の主人は盆と正月と一緒に来たようになっててご舞いの大忙しだ。昨夜は私一人しか客がおらず、ひっそりとしていた宿だったのが、まるで別の場所にいるみたいだった。

「すごいね～!! なんでみんなこの宿に来るんだろう!?!」

と私が声を上げると北京軍の一人が答えた。

「俺たちがいるからさ。お客ってというのは他の客がいるのを見ると安心してその場所に集まってくるもんだ。今夜、俺たちはこの宿の福の神だな! ワッハッハッハッ……」

酔いもまわり、すっかり上機嫌になっている北京メンバーが笑い声を上げ、別のメンバーが後につづいて声をあげた。

「小姐、俺たちがこの宿に決めたのも君がいたからだ。つまり君は宿の主人にとっちゃ幸運の女神って訳だ。さあ女神に乾杯だ! ワッハッハッ……!」

いよいよ酒宴の場が盛り上がってくると、いつの間にか他のテーブルのお客達も乾杯の渦に巻き込んで、仕舞いには宿の食堂一丸となった大宴会になっている。宴もたけなわとなったところで北京軍は更に自分たちが持参した酒の瓶をとりだした。赤いラベルには「五糧液」という名前が読み取れる。この四川省の旅でもあちこちの店や道路脇の看板などでその名前を見かけていた四川省では有名な酒の銘柄で、アルコール度数が50度にもなるような白酒と呼ばれる強い酒だ。

「ええ～! でも皆さんは明日登山でしょう!? 高度が高い場所ではお酒も回るし、もうこれくらいにしておいた方が……」と、とどまる事を知らない酒宴の盛り上がりには驚いた私が申し出た提案などで、勢いのついた中国の酒宴が収まる訳が無い。「俺は鉄人だ! こんな酒くらいなんとも無いさ!」明日は全員の荷物を俺が一人で背負って歩いてやるぜ!」北京軍の男たちは真っ赤な顔をてらてらと光らせながらガッツポーズを決めてみせると、次々にお猪口バイジュウに注がれた強い白酒を飲み干していく。

「小姐! 明日の登山は勿論君もメンバーだからな! 俺たちのガイドはよろしく頼んだぞ!」

「ええ～! でも私はもう2回行ってらるし……」

先ほどから話をしているうちに、この後の旅のコースが帰り道の理塘まで北京軍と一緒にあるのが判明し、それなら理塘までは彼等と合流して行けば良いと誘われていた。

垂丁村から稻城までの道のりは公共バスなど通っていない為、稻城に戻るには自分でタクシーをチャーターしなければならない事、そして垂丁にやってくる前に稻城で出会った上海小姐から稻城から出るバスの切符入手が極めて困難である話を事前に聞いていた私に、北京軍団の申し出はまさに「渡りに船」だったが、もう既に後にしてきた自然保護区に再び舞い戻るのには躊躇があった。

窓の外にはいつしか強い雨が降り始めていた。雨足は夜が更けるに連れて激しくなっているようだ。宴会で盛り上がる室内の中で、私は先程別れた少年の事を考えていた。時計を見ればだいぶ夜も更けている……こんな激しい雨が降る中じゃ、きっと彼はもうやって来ないだろう。これまでアジアの国をあちこち旅してきた経験から、こんな時の口約束が守られる事などほとんど無いのは身にしみて判っている事だった。

こんなに近くににいるのに……自分は何をやっているのだろう。せっかくこの垂丁村までやってきて、一番話をしたかったのはあの少年だったのに、つまらない義理にとらわれて行きずりの旅行者同士の付き合いを優先してしまった。多少の不義理は承知の上で、一緒に少年の友人の家に遊びにいけば、現地の人々の生活や暮らしぶりに直に触れる事もできただろう。そんな機会をより多く持つことこそが、私がこの旅で最も望んでいた事だった筈なのに……

北京の人達には申し訳なかったが、少年に会えない事が確定的になったことで微かな後悔が湧き出していた。雨の叩きつける窓を眺めながら、一人室内の喧騒とは違う場所に漂い出していた意識を呼び戻し、我にかえると私の正面に座っていた北京軍団の一人がじっとこちらを見詰めていた。見たところまだ若く、顔立ちはハンサムだが頭をつるつるの坊主にしていて、先程の自己紹介で私の手帳に自らの呼び名を「石頭シトウ」と書き込んだ男性だ。北京軍の中でも、一番親しげに誘いの言葉をかけてくれていた人物だった。

「何を考えていたの?」彼の問いに「ううん、別に」と軽く受け流し、宴会の仲間入りを続けてふと気がつくと、再び彼の熱い視線が私に向かって注がれていた。その後何度も目を上げる度に彼の視線に出会ってしまい、どうやら私は石頭さんに見つめ続けられているらしい。だいぶ酔っ払っているのだろう。

はぁ……あなたじゃないんだけど。心の中で小さなため息がでた。

(次号に続く)

【‘わんりい’活動報告】

京劇俳優・いんしゅうずい殷秋瑞さんが読む「漢詩の会」

2010年5月12日(水) 10:30～12:00
於：町田公民館8F・学習室6 参加者：13名

「中国語の朗読で、漢詩(唐詩)を聴く会」は、“わんりい”が長年温めていた企画ながら長年実現せずになりました。それが、急きょ陽の目を見ることになり、予約可能な会場を使用し開催されました。

講師は、霸王別姫の霸王役や三国志の張飛、曹操など豪傑役を役どころとする京劇俳優・殷秋瑞さん。ある時その殷さんとの雑談で漢詩の話が出た時、殷さんの口からすると漢詩がまるで溢れ出てくるかのように誦んじてくださいました。あまりの素晴らしさに同席していた一同が感動し、前々から「中国語で漢詩を聴く会」を開催したいと願っていたことが話題になり、我々の話を聞いた殷さんが「やりましょう!」と力強く同意くださいました。

漢詩は日本でも愛好者が多く、ラジオやテレビで有名な俳優さんが漢詩を日本風に読み下して心を込めて朗読をしています。それらの朗読は日本人にとってそれなりの捨てがたい深い味わいがありますが今回は、訓練された漢語の朗読で、漢詩本来のその流れるようなリズムの美しさで漢詩を味わってみることを講座の趣旨として開催が決まりました。

急遽確保した会場は、定員15名の小さい部屋でしたが、却って親近感が増し、参加者総勢の13名が講師の殷さんを囲んで、じっくりと漢詩の朗読を聴くことが出来、とても楽しい会になりました。

京劇の俳優さん達は、台詞回しの練習や、感情移入の訓練に漢詩を日々繰り返し、すっかり自分のものになるまで練習されるそうで、講師にお願いした殷さんは正に今回の漢詩の会の趣旨にぴったりの方だったかと思えます。

まずは日本でも馴染み深い、9つの漢詩(題名別記)、そして目玉は7言句が120行もある、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた白樂天(白居易)の「長恨歌」、それぞれ感情豊かに、さすが京劇俳優ならではの圧倒されるような朗読でした。が、中国語で全編を聴ける機会はめったに無い「長恨歌」は、顔の表情に手の動きも加わってまるで京劇名舞台のセリフを聴くような当日の圧巻でした。



朗読の合間に、作者のこと、作詩の背景、京劇の練習のこと等、殷さんの楽しいお話が聴けて、予定の時間は瞬く間に過ぎて行きました。

特に、李白の「静夜思」が、時代や場所によって文字が替えられ、‘人口に膾炙’かいしや(孟子：広く世人の話題に上って賞賛されること)されていること、他にも「静夜思」同様に長い間に違う文字が使われるようになった詩もあることなどを興味深く聴かせていただきました。

お配りしたミニアンケートでは、参加者全員が再開催を希望するとあり、この声を支えとして、次回を開催したいと思っています。

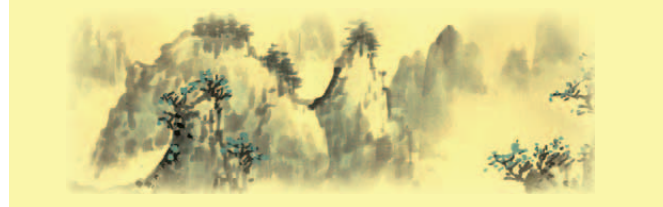
(有為楠 記)



表情豊かに漢詩を朗読する殷秋瑞さん

「漢詩の会」プログラム

1. 風橋夜泊(張継)
2. 静夜思(李白)
3. 早発白帝城(李白)
4. 望庐山瀑布(李白)
5. 春望(杜甫)
6. 清明(杜牧)
7. 春晓(孟浩然)
8. 竹枝詞(劉禹錫)
9. 登鶴雀楼(王之涣)
10. 長恨歌(白居易)



《'わんりい' 掲示板》

【お誘い合わせてご参加を!】〈ビデオ上映とお話〉参加無料 ●定員:30名
 黄土高原のヤオトン暮らしと民間芸術 ～^{ミンガー}民歌・^{ヤンガー}秧歌・^{サンワー}桑洼～

●2010年6月27日(日) 14:00～16:00
 ●町田市民フォーラム3F・視聴覚教室(町田市原町田4-9-8)
 JR横浜線ルミネ口徒歩3分/小田急線南口徒歩7分

●お話:丹羽朋子 東京大学大学院 文化人類学研究室博士課程
 丹羽朋子さんは現在、中国・延安周辺の陝北地域の農村に住み、剪紙を中心とした民間芸術と民俗文化について調査しています。現地での'わが家族'、毛さん一家の暮らしをご自身がまとめた映像や現地の人々自身が写した儀礼風習ビデオなど、陝北地域の農村生活や、そこに息づく民間芸術についてご紹介頂きます。



●主催:'わんりい' ●問合せ&申込み ☎042-734-5100 'わんりい'

京劇俳優・張紹成氏よりの耳寄り情報
 大和古典芸能講座・その二

「昆曲と京劇」(参加費無料/定員80名)

- ◆6月12日(土) 14:00～15:30
- ◆奈良まほろば館(お江戸日本橋で奈良を知る)/2F
 東京メトロ銀座線・半蔵門線「三越前駅」(A1出口)徒歩1分
- ◆講師:張紹成(京劇俳優、昆曲劇院特別プロデューサー)
 昆曲と京劇の成り立ち、登場人物の役柄、演技要素、衣裳について。「武将や女性などの仕草の違い」など、張紹成ならではの講演も必見。
- ◆申込方法:ハガキまたはFAXに住所・氏名・電話番号・年齢を明記の上、下記へ。
 〒103-0022
 東京都中央区日本橋室町1-6-2
 日本橋室町162ビル「シルクロード講演会」係
 ☎:03-3516-3931 FAX:03-3516-3932

茶館銀芽

～2か月に1回、中国茶講座とライブ開催の中国茶館～

会場:山王オーディウム
 大田区山王1-14-7 大森駅北口徒歩10分

- 6月の開館日
 6/18(金) 12:30～20:00
 6/19(土) 12:30～20:00
 6/20(日) 12:30～18:00
- 中国茶茶席:¥700～
 明前獅峰竜井(緑茶)、白葉単叢(青茶)、茉莉花茶・他
- 中国茶講座(各回3～8名)
 ◆入門講座 6月18日(金) 18:30～20:00
 2500円(『中国茶の基礎知識』+お茶2種類代含む)
 ◆特別講座 6月18日(金)/19日(土)
 13:30～15:00
 3000円 今月の茶6種の試飲と解説。
- ゲストライブ(定員35名) 6月20日(日) 13:30～
 2200円(お茶代含) 特別ゲスト:費堅蓉(古琴)
 ♪ゲストライブの時間帯はライブチャージが必要です。
- 展示「中国の民芸・I」 中国の民芸品数々を展示
- アマチュアライブ 随時
- ◆問合せ・予約ラサ企画(Tel/Fax:03-5748-3040)
 主宰:ラサ企画/協力:山王オーディウム



七夕★星降る夜に

～ 吉岡しげ美 音楽詩コンサート ～

出演:吉岡しげ美(ピアノ弾き語り)
 張紹成(京劇俳優)/賈碩(二胡・笛)
 高杉健人(ウッドベース)/酒井一郎(ウッドベース)
 2010年7月6日(火) 18:00開場 19:30開演
 六本木スイートベイジルSTB139
 港区六本木6-7-11 ☎03-5474-0139
 (地下鉄日比谷線/大江戸線「六本木駅」③出口徒歩2分)

【料金】5000円(税込み/全席自由)
 【予約・問合せ】☎03-3991-7973(吉岡しげ美オフィス)
 ★コンサート前後にリーズナブルで美味しい食事ができます。

【6月の定例会と7月号のおたより発送予定日】

- ◆定例会:6月14日(月) 13:30～ 田井宅
- *活動の計画や準備の打ち合わせなど楽しく相談しています。会員は、どなたでも参加できます。
- ◆おたより発送:6月28日(月) 14:00～ 田井宅

～ライブハウスで、中国音楽をたっぷりと～
 張艶 二胡リサイタル～with 張林(揚琴)

2010年6月27日(日) 12:00開場 13:30開演
 アート・カフェ・フレンズ
 (JR・恵比寿駅より徒歩2分 ☎03-6382-9050)

【料金】ミュージックチャージ3000円+1ドリンク500円
 【予約・問合せ】ラサ企画 090-2725-7381
 【予定曲目】陝北抒懷、茉莉花、中国民謡6首連奏、金秋情、梅花新調 ほか